

ALWAYS

現在、「ALWAYS 三丁目の夕日」の第3作が劇場公開されており、ご覧になった方もいると思います。

舞台は、東京タワーを間近に見る下町で、第1作は東京タワーが作られた昭和33年頃の設定です。そして、今回は、東京オリンピックが開催された昭和39年頃の風情を映し出しています。

昭和39年というのは、私が高校3年生の年で、テレビから流れる東京オリンピック開会式の様子は、今でも脳裡に焼き付いています。

東京のビルの建ち並ぶ様子や東京タワー、新幹線の映像は、自分たちの生活とは余りにもかけ離れた別世界の感じがしましたが、高校生だった私にとっては、明るい未来を予感させるのに十分でした。

1956年（昭和31年）、つまりALWAYS第1作の時代設定の少し前のことになりますが、当時の経済企画庁は、経済白書「日本経済の成長と近代化」の中で「もはや戦後ではない」と結びました。

当時を振り返ると、依然として生活は貧しかったけれども、テレビや電気洗濯機が我が家にも登場するなど、確かに街全体が変わりつつある、力強さを感じていたように思います。

1人当りの実質国民総生産（GNP）は、昭和55年に戦前の水準を超え、神武景気が幕開けし、高度経済成長へとひた走ることになったのもこの頃のことです。

東京タワーは「もはや戦後ではない」ことの象徴であり、東京オリンピックはそのことを実証する舞台でした。

当時の街の様子は、映像にもあるように、子ども達が日の暮れるまで外で沢山遊んでいましたし、お医者さんも気軽に往診に来てくれました。地域の人々は互いに助け合い、家族ぐるみでの付き合いをしており、明らかにコミュニティが成立していたといえます。

「ALWAYS 三丁目の夕日」を見ていて懐かしさを感じるのは、この映画が単に自分の人生と重なり合うためというだけではありません。何か大事な

ものを置き忘れてきた、そんな感じがするといった方が良いでしょうか。

世界第2位、第3位というような経済大国になった日本は、今、地域、更には家族の崩壊という深刻な課題に直面しています。日本人が、長い年月の間に培ってきた気風や伝統も失われつつあります。

私には、「ALWAYS 三丁目の夕日」を昭和へのノスタルジーと片付けるだけでは済まないものがあると思っています。勿論、今更昔に戻れはしないし、それが良いとも思いませんが、ただ、私は、これまで置き忘れてきたものの中には大事なものがある筈だし、そのことに目を向ける必要があるのではないかと考えているのです。(塾頭 吉田 洋一)